

1 学校として目指す授業

主体的・対話的に学ぶ（自立した学習者を育てる）児童育成のための授業改善

2 児童の現状

（１）「全国学力・学習状況調査」の分析（小学校 6 年生）

学力・学習状況調査の分析	生活習慣や学習習慣に関する質問調査の分析
国語では「言葉の特徴や使い方に関する事項」で正答率が78.5%と高く、東京都平均（70.4%）および全国平均（66.8%）を上回っている。一方、記述式問題に課題が見られ、引用して自分の考えが伝わるように書く問題の正答率は50.0%と国語で最も低い。また「情報の扱い方に関する事項」は56.3%で、東京都平均（56.7%）をわずかに下回っている。 算数では「知識・技能」（73.6%）「思考・判断・表現」（56.3%）ともに全国平均（60.1%、45.4%）を大きく上回っている。「データの活用」の領域は55.5%で五つの領域の中で最も低く、二次元の表から条件に合う数を読み取る問題では正答率が26.6%にとどまった。また記述式問題は57.8%で、問題形式の中で最も低い。	生活習慣について、「朝食を毎日食べていますか」では93.6%の児童が肯定的に回答しており、全国平均（93.3%）と同水準で、多くの児童が朝食をとる習慣を身に付けている。「毎日、同じくらいの時刻に起きていますか」については、90.3%の児童が肯定的に回答しており、全体として起床時刻を規則的に保っている児童が多いといえる。一方、「毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか」では、21.0%の児童ができていないと回答し、肯定的な回答（77.4%）が全国平均（82.8%）を下回った。就寝時刻の規則性については、家庭と連携しながら生活リズムを整える働きかけが必要と考える。 学習習慣について、「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」では、79.0%の児童が肯定的な回答をした。学習の中で他者の考え方に触れることが、学習内容の多角的な理解につながっていると考えられる。「分からないことやよくわく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができていますか」については、87.1%の児童が肯定的な回答をした。個別最適な学びを充実させる取組により、児童が自分で学び方を工夫する習慣が身に付いてきていると考えられる。

（２）都「学びに向かう力等に関する意識調査」の分析（小学校 4 ～ 6 年生）

本校の都意識調査結果からは、全教科で「授業内容の理解度」が「教科の得意度」を上回る傾向が見られ（国語3.4→2.9、社会3.5→3.0、算数3.5→3.1、理科3.5→3.2）、特に国語・社会でその差が大きい。内容を理解していても、それが自己効力感に十分結びついていない状況がうかがえる。学習の進め方を見ると、「工夫しながら進める」（3.28）が比較的高い一方、「理解しながら進める」（3.04）が最も低く、中でもメモを取りながら話を聞く（2.79）、理解したことを他者に説明する（2.83）、文章の要点に線を引きながら読む（2.87）など、知識を「使う」「伝える」場面に関わる項目が低い値を示している。
また、学習の見通しを持つ（2.9）、学習内容を振り返る（2.9）の項目も低く、学習の計画・実行・振り返りという自己調整学習のサイクルのうち、特に入口（見通し）と出口（振り返り）の部分にメタ認知面での弱さが見られる。

（３）その他の資料を活用した分析

活用した資料名及び分析結果
東京ベーシックドリル診断テスト（各学年とも1つ下の学年の内容で実施）の結果、学年が上がるほど正答率・満点率が低下する傾向が明確であった。2年生（1年内容）は正答率90%前後に対し、6年生（5年内容）は67～72%、満点率はほぼ0～8%にとどまり、R6年度の「学年が上がるほど正答率が低下する」、R4・R5年度の「高学年で正答率50%未満の児童の増加」という指摘と一致する。特に図形・量・データ活用領域（A2・C2系）は計算領域より10ポイント前後低く、R7年度の「図形領域の理解不足」と符合し、基礎計算より量的感覚・図形認識の定着が経年的に弱い課題として継続している。

3 児童の学力・学習状況等の課題

理解度と記述・表現力の乖離：授業内容は「分かる」と感じている児童が多い一方、記述式問題を苦手とする児童が多い。
基礎・基本の定着における個人差：一定数の児童が基礎的な内容の定着に至っておらず、学級内での習熟度のばらつきが継続的な課題となっている。
情報活用能力・複数資料の関連付けの弱さ：いずれの教科でも、複数の情報や資料を関連付けて整理し、根拠をもって説明する力に課題がある。
学習への主体性・家庭学習習慣の課題：素直に学習に取り組む一方で指示待ちの姿勢も見られ、家庭学習が習慣化していない児童も一定数存在する。
メタ認知・自己調整学習の弱さ：見通しを持って学習に向かうことはできるが、振り返りを通して学習過程を整理・分析する力が弱い児童が多い。

4 学校全体の授業改善の視点

- 1：児童が問いをもち、見通しをもって主体的に学習に取り組む授業
※授業の導入段階での発問や資料提示の工夫/単元の初めに学習計画を児童と共有、見通しをもたせる。/デジタル学習基盤の活用
- 2：学びを振り返り、自己の成長やつまづきを自覚しながら、次の学びに生かす授業
※学習のメタ認知化/ふりかえりの視点提示/デジタルを活用したポートフォリオの活用
- 3：児童が学び合いの中で互いのよさを認め合い、考えを表現し合いながら協働的に学習する授業
※交流場面の意図的設定/思考の整理のためのツール活用/相互評価や活動の他者評価/デジタルを活用した共同編集

【授業改善推進プランの活用法】

- ①「1 学校として目指す授業」を設定する。
※学校経営方針との関連を確認すること。
 - ②「1 学校として目指す授業」に関する各種調査の特徴的な課題を「2 児童の現状」にまとめる。
 - ③「2 児童の現状」を基に、学校全体の課題を焦点化して、「3 児童の学力・学習状況等の課題」にまとめる。
 - ④「3 児童の学力・学習状況等の課題」を基に、「4 学校全体の授業改善の視点」を設定する。
 - ⑤「4 学校全体の授業改善の視点」を基に、「5 各教科における授業改善の方策」を設定する。 → 学校指導課へ提出する。
- ⑥12月末に実施状況を評価し、3学期以降の指導に生かす。
評価 ○...実施した。 ○...一部実施した。 △...未実施

5 各教科における授業改善の方策

	国語	評価	社会	評価	算数	評価	理科	評価	生活	評価	音楽	評価	図画工作	評価	家庭	評価	体育	評価	外国語	評価	道徳	評価
低学年	・最初に単元のゴールを確認できるようにして、学習の見通しを持たせる。いろんなペアの組み合わせで伝え合う機会を増やし、十分な時間を確保する。				・学習の進め方を児童に示し、1時間の見通しをもたせる。 ・到達目標を具体的に示し、児童と共有する。 ・いろんな児童と共有する時間を取る。				・動植物を育てる活動では、本やネットなどの複数の情報を比較、整理する活動を取り入れ、情報活用能力を高める。 ・何のためにその活動を行うのかのゴールイメージ（見通し）をもたせた学習活動を展開する。		・1時間の学習の流れを提示し、児童が安心感をもって学習に臨むことが出来るようにする。		・グループ単位で活動させる中で、互いの良さに気付くようにする。 ・活動のねらいを児童に伝え、見通しをもたせる。 ・タブレットに写真を残し、鑑賞や振り返りに活用させる。				・運動遊びの規則の工夫を通して、自分たちで遊びを発展させる経験をさせる。 ・振り返りカードでは、フリー記述よりも選択式の項目を増やし、自己調整学習に慣れさせる。				・自分の思いや考えを表現できる雰囲気づくりをする。自分ごととして考えられるように共有する時間を増やす。	
中学年	・単元の見通しを立て、自己調整を図りながら授業を進められる単元設計にしていく。 ・ICTを用いるなど、他者と交流する機会を増やし、互いの良さを認め合えるようにする。		・導入段階で具体物を用いた発問提示を行い、見通しをもって取り組ませる。		・到達目標を共有し、学習の方向性を揃えつつ児童がそれぞれのめあてを立てられるよう工夫する。 ・自己調整をしながら、必要に応じて他者と協働的に学ぶ時間を設ける。		・授業の導入段階において、具体物の提示など、児童が興味関心を引くような資料提示を行う。				・1時間の学習の流れを提示し、見通しをもたせる。 ・児童が自ら問いをもてるよう、授業の導入段階での発問を工夫する。 ・ペア学習やグループ学習を意図的に設定する。		・1時間の学習の流れを提示し、見通しをもたせる。 ・児童が自ら問いをもてるよう、授業の導入段階での発問を工夫する。 ・めあてや計画をワークシートに書かせて、イメージを固めたり、援助希求力などを育てる。				・ICTや視聴覚資料を活用し、手本や試技などを見ながら学習をすすめていけるように工夫する。				・友達との意見交流などを通して、様々な考えに触れ、自己の考えを大切にしながら、相手の意見を認められるようにする。	
高学年	・毎時間単元計画とその時間のめあてを確認し、現在地が分かるようにする。その後の授業を意識した振り返りの視点を提示する。 ・共有の時間を設け、協働的に学びを進められるように授業をデザインする。		・導入段階での具体物を用いた事象提示や発問を大切に。また、単元によっては、児童に学習内容を選択させて進める。		・めあてやふりかえりの視点を学年で共有し、自己調整を図りながら単元の学習を進められるようにする。 ・学習の場や相手を選択し、協働的に学ぶ環境を整える。		授業の導入段階の資料提示を工夫し、児童が自ら問いをもって学習に臨めるようにする。				・1時間の学習の流れを提示し、見通しをもたせる。 ・児童が自ら問いをもてるよう、授業の導入段階での発問を工夫する。 ・ペア学習やグループ学習を意図的に設定する。		・ICTで制作過程や作品を共有し、児童が見通しをもつことで、表現の多様なアイデアや自分なりの問いを生み出せるようにする。 ・構想や手順をワークシートに記述させ、思考を整理し、自らの工夫や困り感を主体的に発信できるようにする。		・単元のはじめ、2時間続きの授業の初めにめあてや流れを提示し、見通しをもち学習できるようにする。 ・体験的な学習を多く取り入れ、技能が身に付くようにする。 ・裁縫の基礎的な技能の学習の後に発展的な学習の時間を作り、自分なりに計画し、工夫して製作に取り組めるようにする。		・ICTや視聴覚資料を活用して学習計画と到達目標（模範動画など）を児童と共有し、自ら問いや見通しをもてるようにする。		・交流場面の意図的設定を継続する。		・多角的に考える力を高めるため、グループによる協働的な対話の場面を意図的に設定し、デジタル上での意見集約や相互評価を通して、自分の考えを表現し合えるようにする。	